

今後の議論の仕方の基本的考え方（案）

100年後の人々に世界に誇り得る自然・文化遺産としての霧ヶ峰を手渡すため、霧ヶ峰自然環境保全協議会の協議、意見を作業部会において整理し、深化させた上で、目指すべき霧ヶ峰の姿及びその実現のために実施する事業の長期展望(骨格)に関し、協議会としての合意形成を行う。

長期展望は、草原、湿原、樹叢等に関する保全再生計画、魅力的な“彩り草原空間”形成のための景観・施設整備及び自然への負荷軽減対策に関する基本構想、霧ヶ峰エコツーリズムモデル構築計画の3つから成るものとして、協議会が平成20年度中にとりまとめる。

各項目について今後の議論の基本的考え方は次のとおりとする。

【「草原」「湿原」「樹叢」等の保全再生について】

1 「100 かゼロ か」の議論ではなく、具体的な区域割の議論をする。

霧ヶ峰の草原は採草という人間の活動により維持されてきた歴史があり、全国的にも希少な生態系を有するものとして保全が必要である。併せて、天然記念物である湿原と樹叢の環境への対策が不可欠である。

一方で、森林の持つ災害防止、水源涵養等に関する機能を考慮する必要がある。



「霧ヶ峰のすべてを草原に」あるいは「すべてを森林に」という二者択一の（「100 かゼロ か」の議論ではなく、草原、湿原、樹叢と森林の調和がとれた霧ヶ峰とするための議論を行う。

霧ヶ峰自然環境保全協議会が目指すべき霧ヶ峰の姿として合意した内容は、地図上で具体的な区域割をして示す。（これは、レンゲツツジの取扱いについても同様とする。）

なお、この目指すべき霧ヶ峰の姿は、現時点におけるものであり、将来的に気候の変動や社会経済情勢の変化等があった場合は、それに応じて見直す。

2 100年後の姿とともに、それに向けた行程を議論する。

100年後の人々に世界に誇りうる霧ヶ峰を手渡すための議論を行うものであるが、直ちに目指すべき霧ヶ峰の姿を実現できるものではない。霧ヶ峰に固有の自然の時間の流れや投入できる人的・物的資源の制約を考慮する必要がある。



目指すべき100年後の霧ヶ峰の姿とともに、それに向けた行程を議論するものとし、10年後、20年後、30年後、40年後、50年後の到達点の目標設定を行う。

3 対策の実施方法と実施主体を広い視野で具体的に議論する。

目指すべき霧ヶ峰の姿の実現のためには、これまで地権者、自治会、諸団体、行政等が行ってきた活動を発展させつつ、さらに高い次元での保全再生活動を展開していく必要がある。



霧ヶ峰の草原、湿原、樹叢及び森林の保全又は再生のために講じるべき対策について、科学的知見に基づき具体的検討を行う。

それに当たって実施主体及び財源等の検討を併せて行うものであるが、その議論は、従来の枠にとらわれず、霧ヶ峰の資源の新しい価値の発見及びエコツアーの進展、民間企業やNPOの参画意欲の動向、全国の先進的な整備手法等を勘案しつつ、広い視野を持って行う。

【“彩り草原空間”形成・施設整備、自然への負荷軽減対策について】

1 霧ヶ峰各地区の連携を前提に、全域の整合性を考えながら議論をする。

利用者を引きつけ、足を留めさせ、感動を与えるような整備を効果的に進めるためには、霧ヶ峰全体について統一的な考え方にに基づき、また、各地点の連携を図りながら、整備する必要がある。



個別の地区の景観や施設整備に関する議論は、霧ヶ峰全体の中で、その地区の特性や資源、施設をどのように生かすかを考えながら行う。また、案内板、看板等について順次デザインの統一が図られるよう、統一デザインの検討を行う。

2 自然への負荷を現在より軽減させることができ、霧ヶ峰を保護と利用の調和の取れた場所とするための仕組みづくりと施設整備について議論する。

霧ヶ峰を美しいまま子孫に手渡すためには、その利用は持続可能なものでなければならない。



施設整備は、利用者が霧ヶ峰に親しむためのものであると同時に、自然への負荷を軽減させる役割を有することを念頭に置きながら議論する。また、過剰利用等への対応は、施設整備だけではなく、施設整備(ハード)と負荷軽減の仕組みづくり(ソフト)を併せて議論する。

3 利用者負担のあり方についても議論する。

整備した施設の適切な維持管理の視点や限られた財源の中で整備をいかに進めるかという視点が必要である。



維持管理費用等に当てるための利用者負担のあり方についても議論するとともに、上記の草原等の保全再生についての「3」の考え方を踏まえて議論する。

【霧ヶ峰エコツーリズムモデル構築について】

1 霧ヶ峰ならではのエコツーリズムモデル構築のための議論をする。

霧ヶ峰で展開するエコツアーは、その自然・歴史に則したものでなければならず、また、いずれの団体、インタープリターもそれを踏まえた良質なインタープリテーション、受け手の心に届く質の高いガイドを提供するよう条件整備を図る必要がある。



霧ヶ峰ならではのエコツーリズムモデル構築のため、霧ヶ峰におけるインタープリテーションの指針とプログラム(活動参加型を含む)の内容、エコツアーの実施体制等について具体的に議論する。

2 霧ヶ峰に関する情報提供体制整備の議論を併せて行う。

年間を通じて霧ヶ峰に関する情報提供、案内を行う体制が、現行では整備されていない。



ビジターセンターのあり方も含め、情報提供、情報発信の方法について議論する。

3 広域的連携を視野に入れた議論を行う。

周辺地域と結んだプログラムを提供すれば、魅力がさらに向上し、滞在日数も増加する。



蓼科・八ヶ岳地域、美ヶ原等との連携の可能性や方策も併せて議論する。